



A WAY OF LIFE

上原ひろみさん

HIROMI UEHARA

ミュージシャン

「見たことのない景色」を
聴かせてくれるエネルギー体

クラシックやロックの要素を取り入れた、展開がまったく予想できない楽曲、卓越した演奏テクニック、ライブでの激しいパフォーマンス。2003年に全米デビューを果たして以降、世界で活躍しているピアニストの上原ひろみさんは、「ジャズ」という枠を超え、エネルギーにあふれる音楽を聴かせてくれる。世界を駆けめぐるそんなアーティストが、感情を音にすることや全米デビューのエピソード、音楽が生まれる状況、海外で演奏する際のスタンスなどを語ってくれた。



©Yuka Yamaji



PROFILE

上原ひろみ | HIROMI UEHARA

1979年、静岡県浜松市生まれ。6歳よりピアノを始め、同時にヤマハ音楽教室で作曲を学ぶ。17歳の時にチック・コリアと共演。1999年、ボストンパークリー音楽院入学。在学中にジャズの名門テラーク・レーベルと契約。2003年にアルバム「Another Mind」で世界デビューし、欧米でのライブ活動をスタート。2004年春、セカンドアルバム「Brain」発売。アメリカの「サラウンド・ミュージック・アワード<ニュースター賞>」を受賞。2005年、活動の拠点をボストンからニューヨークに移す。2006年1月、欧米でサードアルバム「Spiral」発売。「ボストン・ミュージック・アワード<ベスト・ジャズ・アクト賞>」を受賞。2007年、新たにギターを加えたプロジェクトとして「HIROMI'S SONIC BLOOM」を結成、3月にアルバム「Time Control」を発売。現在公開中の映画「オリオン座からの招待状」ではメインテーマ曲を担当している。

©Yuka Yamaji



9月に「ブルーノート東京」で催されたチック・コリアとの共演ライブより。ブルーノート東京では11月28日、29日に上原ひろみ〜HIROMI'S SONICBLOOM「タイム・コントロール 日本ツアー」のライブが開かれる。

“自分がまだ見せてないものを見せたいというより、自分がまだ見えていない部分を見つけないんです。”



※1 アメリカ出身のピアニスト、キーボーディスト、作曲家。ボサノヴァ、ロック、クラシックなどといった要素を織り交ぜた楽曲およびプレイを得意とするジャズ・ジャイアント



思ったことを自由に弾く、
即興音楽の楽しさ

上原ひろみさんは、ジャンルに収まらない音楽を聴かせてくれる。ロック、クラシック、時にパンクやテクノの要素も盛り込まれ、どの曲も心地よい緊張感とエネルギーにあふれている。そしてリスナーの多くはこんな言葉を口にする。

「上原ひろみの曲を聴くと、いろんな景色が見えてくる」

ピアノを始めたのは6歳。母親に連れられピアノ教室に行ったことがきっかけだ。上原さんは、最初の教師である疋田範子さんからユニークな指導を受けた。疋田さんはある曲を演奏する時は「赤を弾いて」、また異なる曲では「青を弾いて」と幼い上原さんに告げたという。「疋田先生は楽譜自体も赤鉛筆や青鉛筆で

塗って、感情を音にすることを実体験として教えてくださいました」

そんなレッスンが楽しくて仕方がなかった上原さんは、「純粋に音楽が好きで、ずっと続けるためにはどうしたらいいのだろうか」と思っていたという。そしてジャンルを問わずに音楽を聴き、自然にジャズも好きになった。

「ジャズのスウィング感が好きになり、即興演奏を知ってから、その時に感じたことを自由に弾いていいんだということがとても楽しくて仕方がなかった」

ヤマハ音楽教室時代に海外公演を経験し、17歳でチック・コリア(※1)と共演した。日本で開催されたライブのステージに呼ばれたのである。

「すごく嬉しかった。一音も聴き逃してなるものか、と思いました。ものすごいことをしているという感覚はなかったです。チックさんは『一生懸命に頑張っている子がいるからステージに出してあげるか』といった気持ちだったと思っ

DISCOGRAPHY

ます。運良く一緒に演奏できる機会をいただけるのだから、思う存分やってやろうという感じで臨みましたね」

そんなラッキーガールは、自然に世界に目を向けていた。

音でしか物が言えない。 そして音は嘘をつかない

「中学校の頃からアメリカへ行きたいと思っていました。一番行きたくなったのが二十歳の時。エンターテインメントの中心地で同じものを志している人に囲まれて生活してみたいという思いもありました」

そしてボストンのバークリー音楽院に入学し、在学中にジャズの名門テラーク・レーベルと契約する。日本人アーティストが海外のレーベルから全米デビューしたこと自体が稀なケースだ。当時のこんなエピソードを教えてくれた。

「テラーク・レーベルの社長が私と契約をしようとした際、私のプロフィールを見た同業者に『馬鹿げている』『アジア人で、しかも女性。ボーカリストならまだしも、インストゥルメンタルはありえない』と言われたそうです。それでも契約してくれたというのは、とても信頼してくれたんだと思いました」

デビュー以降、アメリカ、ヨーロッパ、中東などの海外ツアーを成功させてきたが、海外では外見やキャリアから「なめられることは日常茶飯事」らしい。上原さんは「アジア人の女性というだけで、差別される要素が盛りだくさんですから」と笑う。

「まず視覚的な違和感があるのでしょうか。日本人からすれば、外国人が寿司を握っているような感覚。ネタを食べる前に『あれ?』って思う違和感です」

海外で、しかもまわりは外国人ばかりという状況。そんな時に存在や個性を認めてもらうには何が必要なのだろうか。上原さんは、きっぱりと答える。

「音でしか物が言えないですね」

だからといって上原さんに「音楽を認めさせたい」という片意地を張った姿勢はない。

「ステージに出ると日本人は特に若く見られます。『子どもが登場した』といった印象でしょう。だから、音を聴いてもらえない。音は嘘をつかないですから、演奏をして通じ合ったものがすべてなんです。それを信じてやっていくしかないんです」

イメージ通りにならない 部分はスパイスとして

自身が描いている音をメンバーに伝える際に大切なことは何だろう。

「細かい部分から詰めていくこと、筋道立った楽譜を渡すこと。そしてピアノだけ録音したテープを渡して想像をふくらませてもらうなど、自分が思い描いている同じ世界を相手にも描いてもらうためのヒントとなる素材をたくさん渡します。それで私のイメージと重ならなかったとしても、その部分がスパイスとしておもしろいかどうか考えます。自分のイメージと違うからといって否定するのではなく、『ああ、そういう風に理解したのか』と受けとめる柔軟さも必要だと思います。

そして言葉でもきちんと伝えます。楽曲のテーマは、たとえば『タイムマシンが壊れた感じ』とか、『ドラムを初めて叩いた人のようなプレイにしてください』とかいった細かい指示を出します」

上原さんは、楽曲を綿密に構築していくタイプだ。「同時に頭の中で鳴っている」という、すべての楽器の音を楽譜に落とし込んでいく。その頭の中で鳴っている曲は絶えず変化するという。

「即興になることが多いので、同じ曲でも7分の時があれば、20分の時もあります。それは毎日収縮するもの。そういった部分も音楽のおもしろさだと思っています」

優れた料理人は素材を集めた時点で思い描く料理の味が想像できるというが、音楽にはまた異なる面があるようだ。

「音楽もおおよそ想像できますが、計り知れない未知の可能性の部分もあります。自分だけでつくるわけじゃないから。最初に思い描いたイメージが一番近いものがアルバムとして発売されていますが、全然違う方向に行っちゃった



「Another Mind」

23歳で全米デビューを果たし、ジャズを新たな境地へ導いた記念碑。2003年6月リリースのファーストアルバム



「Brain」

2004年4月リリースのセカンドアルバム。同作で2004年「サラウンド・ミュージック・アワード」最優秀新人賞受賞



「Spiral」

2005年10月リリース。ピアノでオーケストラ的なサウンドに挑戦。同作で「ジャズディスク大賞 日本ジャズ賞」受賞



「Time Control」

2007年2月リリース。ギターを加えたニュープロジェクトHIROMI'S SONICBLOOMの作品のテーマは「時間」



WEB

上原ひろみオフィシャルウェブサイト
<http://www.hiromiuehara.com/>



BLOG

上原ひろみ〜旅の思ひ出〜
http://www.frontpage.co.jp/hiromi_uehara/blog/

上原ひろみ〜HIROMI'S SONICBLOOM 「タイム・コントロール 日本ツアー」

11/17(土)の ZEPPLINE 札幌でのツアーを皮切りに、
 仙台、高崎、新潟、名古屋、大阪、東京、福岡、
 浜松、広島などで開催。
 詳しくはオフィシャルウェブサイトで。

けど、これはこれでもおもしろかったというテイクはライブで披露することもあります。料理の仕方はいっぱいあります」

音楽を通じて見たことのない景色を見たい

上原さんのライブは、すこぶるパワフルだ。「高速の指」と謳われるスピードで指が鍵盤の上を走り、演奏する身体は大きく揺れる。そんな自身を評して「エネルギー体になってますね」と笑う。その状態でも「すべての音はしっかり聴こえている」という。

「ものすごく盛り上がっているトランス状態の自分を冷静に外から眺めている自分もいる。舞台監督のように全体を見下ろしている自分と、わけわかんなくなっている自分がいるんです」



上原さんが世界各地へ出向いた際に心が動いたことを綴るブログ「上原ひろみ〜旅の思ひ出〜」が好評だ。「もともと写真が好きで、ブログで発表するのも形になってきたので、いろんな場所に行っているし、見ている人は旅する人ばかりでないで、いろんな街を皆に見せてあげたらおもしろいかなと思って」

演奏中にたとえば「ギターが半音ずれた」といったことも「一瞬にわかる」という。

「そんな時、舞台監督の私が演奏している私に降りてきて、ライブ中でもメンバーにすごい視線を送ります。気を引き締めてもらうわけです」

最新アルバムでは疾走感にあふれる激流のような曲が目立つが、上原さんの曲にはゆるやかな流れを連想させる穏やかな曲も多くある。「静と動を考えた時、私は静のほうがエネルギーを使うと思っています」と語るように、静かな曲にもエネルギーが満ちあふれている。しかし突如、ゆるやかな流れが激流に急変するような展開の曲もあるので、予想できない楽しさも存分にある。

そんな音楽が生まれる状況、そして楽曲の展開を聞いてみた。

「メインテーマのようなものが降りてくる瞬間は、何かに動かされている時でしょう。気持ちの揺れを音に反映しているの、曲の流れの緩急は感情のスピードだと思います」

上原さんは、これからどんな音楽を聴かせてくれるのだろうか。

「自分がまだ見せていないものを見せたいというよりは、自分がまだ見えていない部分を見つけたいんです。私がどこへ行きたいのか、私ですらわかっていませんから。とにかくまだ見たことのない景色を見たい。どうなるのか、常に結末が見えないものをやってきたい」

「上原ひろみ」というエネルギー体が放つ音楽は、これから「見たことのない景色」を聴かせてくれることだろう。